

最新事情

学科やコースの垣根を越えて
学びたい学生の意欲に応える

名古屋経営短期大学

(愛知県尾張旭市)

社会に出ることを目前に控えた学生にとって、教員は社会人として働く先輩でもある。学科やコースの垣根を越えて教員が連携し、先輩として時には厳しく、時には優しく親身になり、学びたいという学生の気持ちに応えることで高い就職率を維持しているのが名古屋経営短期大学だ。総合ビジネス学科の取り組みを中心に、同短大の目指すものについて伺った。

教員と学生の距離が近く 何でも相談できる環境

授業開始の直後、教室ではまだ入学したばかりの1年生が肩を並べ、机の上にかばんを置いている。総合ビジネス学科キャリア秘書コース主任の西川三恵子教授が担当する「秘書検定講座Ⅰ」の第一回目の講義だ。その様子を見て、授業の説明を始める前に西川先生が一言。「皆さん、かばんは机の上に置かない。かばんは床に置いたりもしますから、底は汚れているでしょう? これはこの授業、この短大だけのルールではなく、大人の社会のマナーです。気を付けましょうね。」

学生たちは、「そういうものか」という顔でかばんを脇に下ろし始めた。こんなふうには

しつと指摘されたことはこれまではなかったかもしれない。きつとこの先、彼女たちが机にかばんを置くことはないだろう。

名古屋経営短期大学は「ビジネス情報」「キャリア秘書」「観光ビジネス」「ファッショントレンド」「医療事務」「現代心理」の6コースを有する総合ビジネス学科と、子ども学科、健康福祉学科の3学科があり、約400名の学生が学んでいる。名古屋女子商科短期大学を前身とすることから、長きにわたり社会に出て働くための実践的な能力、知識を育成することに努めてきた。平成22年度の就職内定率は総合ビジネス学科が97・5%、子ども学科・健康福祉学科は100%と、高い水準を維持している。

同短大の大きな特長は、学科の垣根を越えて、教員同士の連携が図られているところだ。「小規模の大学ですから、お互いによい関係を作り上げ、学生のためにできるだけのことをしています」と古橋エツ子学長は胸を張る。西川先生も「学生たちはそれぞれ『この問題はあの先生』というふうによく相談先を見つけてきますし、どの教員も自分のゼミ生でなくても隔てなくアドバイスします。それを教員同士がさりげなく伝達し合うことでより深く、学生と関わる事ができるのです」と大きくうなずく。

古橋学長が「3学科が合同して何かできないか」と発案し、昨年度から行っているのが「ライフプランニング」だ。1年前期で全学生必修となっているこの授業は、全15回を3学科の教



名古屋経営短期大学
キャンパス



「秘書検定講座Ⅰ」初回の授業では、内容や難易度を自分自身で測るため、模擬テストを行う



古橋エツ子学長

総合ビジネス学科
キャリア秘書コース主任の
西川三恵子教授



秘書検定準1級に合格した
小栗葉つ美さんは、
医療系の情報システム企業に
いち早く内定。
「卒業までに、まだまだ
学びたいことがあります」



身近な現実近づけて 興味を持たせる

員が持ち回りでほぼ全てを担当する。同短大の3学科で扱う内容のキーワードは「ビジネス社会」「保育」「介護福祉」。これを並べてみると、学生たちが卒業後の人生で経験するであろうことばかりだ。せつかく同じキャンパスで学ぶのだから、3学科それぞれの視点からどのような問題、考え方があるのかを意識に留めて、将来の人生設計に生かしてもらおうのが授業の狙いだ。ここで興味が湧いたら、学科を越えて授業を受けることができる。規模の小ささを生かし、求める学生には求めているものがきちんと届くようにしたいという思いが伝わってくる。

西川先生は「秘書概論」「秘書実務」「話し方演習」「ビジネスマナー」「ホスピタリティ論」「秘書教養」「秘書検定講座」など秘書、ビジネスマナーに関する授業を幅広く担当している。「本学の総合ビジネス学科のカリキュラムでは、それぞれ自分の選択コースの授業だけでは卒業の単位は足りません。選択コースをベースにして他のコースの授業を受けなければならぬのです。キャリア秘書コースの学生なら、それをベースに他コースも学ぶことで、例えば『ビジネス情報』に強い秘書だとか、『観光ビジネス』を学んだ秘書を目指すことができます。専門だけにとどまらず、いろいろな分野について勉強してもらいたいと思っています」。

何を自分の軸にして、どのようなプラスアルファを身に付けることができるか。ここでどれだけ努力できるかが、2年間をよりよく過ごすための分かれ道になってくるのだろう。短大での学びで、西川先生が学生に身に付けさせたいと望むのはどのようなことだろうか。

「一番身に付けてほしいのは、社会で耐えていく力、生き抜く力です。これは、具体的にはマナーだと私は考えています。コミュニケーションを取って人間関係をつくり、信頼されると仕事を任せられる、そうすると達成感を得られる。社会人はこの繰り返しの中で生きていきます。そのためには専門の知識や資格も必要ですが、これは後からついてくるもの。やはり、この2年間でしっかり学んで欲しいのはマナー。『あいさつをする』『かばんを机の上には置かない』『無断の遅刻・欠席は許されない』といった、大人社会ではこうだ、これは許されないということは、身に付くまで繰り返し指摘していくことで実社会でもできるようにするのがいいです。これだけはいつも厳しく指導しています」。

先にも述べたように、同短大ではコースや学科を越えて、さらには併設校である名古屋産業大学とも相互の単位認定を行っており、意欲のある学生は自分の興味に応じて授業を受け、資格を取得することができます。秘書検定講座は、キャリア秘書以外のコースの学生だけでなく、他学科や大学の男子学生までもが受講するなど、検定で学ぶ内容が就職活動や社会人の基礎につ

最新事情 ②……名古屋経営短期大学

ながることは十分に認知されているようだ。
 学生に学習意欲を持たせるために、西川先生はできるだけ学生が自分に引き寄せて考えることができるよう、身近な例を挙げることを心掛けていているそうだ。

「例えば『話し方演習』では自己紹介のスピーチを考えさせます。目標としては就職活動や社会人になってからの自己紹介ですが、いきなりそこを目標にしても興味を持ってない学生も。そんなときは、『サークル仲間の会合だったらどんな自己紹介をしますか？』そこで、〇〇学科で〇〇を学び、将来は〴〵なんて言ったら、相手に興味を持ってもらえるでしょうか？ 相手や場面によって話す内容が変わってくるのが分かりますよね」というふうに説明すると、がぜんやる気が出てきます。

教員自身が元気であること、それが学生にも波及する

同短大のカリキュラムを最大限に活用し、いち早く就職内定を手にしたのが、総合ビジネス学科キャリア秘書コース2年生の小栗菜つ美さんだ。小栗さんは1年生の1年間で秘書検定3・2・準1級を取得。医療事務検定などにも積極的に取り組む、2年生になって間もなく、医療システム販売の企業に就職が決まった。「秘書という仕事に憧れてキャリア秘書コースに入りました。以前から『女性らしさ』に関心を持っていて、女性ならではの細やかさを生か

せる仕事をしたいなと思っていましたからです」。

入学当初から、やりがいを持って働ける仕事をしたい、ずっと続けられ、人の役に立てる仕事をしたいと考えていくうちに、医療の仕事にも興味を持つようになったという。医療事務の資格講座も積極的に選択して勉強し、それぞれの担当教員のところにも頻りに質問に訪れた。「先生方がとても親身になって相談に乗ってくださったのがうれしかったです」と小栗さん。準1級面接の練習は、日本秘書クラブ東海支部の講座にも参加した。社会人や現役の秘書に囲まれ、大変よい刺激になったそうだ。

その頑張りには、西川先生も太鼓判を押す。「秘書検定講座は、前期は3級、後期は2級受験を目標に授業を進めます。小栗さんは、6月の検定で3・2級を、11月には準1級を受験して一度で合格。授業では解説しない級も受験を目指す学生には個別指導で対応していますが、彼女は特によく質問に来てくれました」。

積極的な取り組みで、就職活動に向けて人より早くスタートを切れたという小栗さん。彼女がもう一つ、先生方から学んだことは「元気で明るく仕事をする」という姿勢だ。社会人になれば、ばうまくいかなないことやつらいことがあっても、顔に出さずに頑張らなくてはいけない場面がある。「西川先生は、いつも笑顔で元氣よく声を掛けてくださいます。先生ではありますが、社会

人の先輩としてのモデル像でもあります」。

教員自身の仕事に向き合う姿勢は、毎日接する学生たちに想像以上に大きな影響を与えているといえるだろう。西川先生が、毎日学生に接する上で気を付けているのは「メリハリ」だ。「行事などでは私も人一倍楽しんでいますが、授業は厳しく、やるべきこと、やってはいけないことをはっきりさせることを心掛けています。授業中は丁寧な口調で話すこともその一つ。きれいな言葉を聞かせ続ければ、学生は何かあったときには『先生はこう言っていたな』と思い出して使えらると思うのです」。

学生に、どんな大人になってもらいたいのか。それはビジネス実務教育に携わる教員には、特に不可欠な視点であるだろう。「心が元気で、心にゆとりを持っていれば、笑顔でいることができる」という西川先生。学生は日々、教える側の姿そのものから学んでいることを実感させられる言葉だった。



瀬戸市役所でのインターンシップ(上)に参加した学生は観光ガイドを体験。10月に行われる大学祭(下)では、尾張旭市の市民祭りと合同でスタンプラリーを行うなど、地域と連携した活動に取り組んでいる